

胎児の世界

——映画文学人生論

三木成夫 (1925-1975)

『胎児の世界』(1983) 「中公新書」

『内蔵のはたらきと子どものこころ』(1886)』

『人間生命の誕生』(1996) 「築地書房」

『生命とリズム』 「河出書房」

胎児は一億年を費やした脊椎動物の上陸誌を一週間で夢のごとくに再現する

人生とはなんぞや。この大問題を考えるとき、人生五十年や八十年、もしかすると百年、だけに限定できない。受胎してから誕生までの十ヶ月も含めて考える必要があると思う。

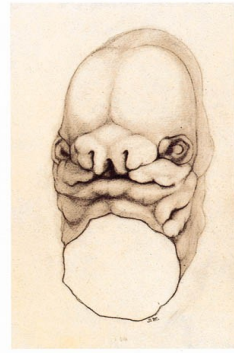
三木成夫の『胎児の世界』を読むと、その十ヶ月の人生の片鱗をかいま見せてもらえる。

この地球上で生命が発生したのは、三十億年もまえの海の中だ。やがて原生代の海から無脊椎動物が姿を現わし、五億年前に、古生代の海から、こんどは脊椎動物が現れる。そして古生代の後半に脊椎動物は海から上陸した。

新生代には上陸を終えたばかりの両生類が最初の陸生の脊椎動物として生を営み、中生代には爬虫類、新生代には哺乳類が姿を現わす。

人類の誕生は約六百万年前だが、胎児は、古代の海の生命記憶を持っているという。「胎児は、受胎の日から指折り数えて三十日を過ぎてから僅か一週間で、あの一億年を費やした脊椎動物の上陸誌を夢のごとくに再現する」。

古代の海に似た母親の胎の羊水にうかぶ胎児の顔はさまざまな動物のおもかげを見せながら変化していく。受胎三二日で魚、三四日で両生類、三六日で爬虫類、三八日で哺乳類——その間に一つの夢を見ているというのだが、いったいそれはどんな夢か。



胎児の世界

映画文学人生論

ダーウインは、すべての生物種が共通の祖先から長い時間をかけて、自然選択のプロセスを通して進化してきたと言い、ヘッケルは「個体発生は系統発生の短い反復である」と言った。胎児の生命記憶は、二人の説を証明しているかのようだ。

では、胎児の生命記憶は生後によりみができることがあるのか。よみがえるとすれば、どんな風にかたたとえば、秋の夕暮れに、ひとり物思いにふけているとき、お寺の鐘が鳴る。そのときは気がつかなかったのに、しばらくして、ふと、われに返って、ああ、そういえば鳴ったなど、その音を思い出すことがある。記憶は、とくに意識していなくても、ちゃんとおこなわれているのだ。これを「無意識の体得」と三木成夫はよんでいる。

彼はスーパーで椰子の実を買ってきて、穴をあけ、ストローを差し込んで、中の液体を吸ったことがある。懐かしい味がした。「なんだ、こりゃあ」「いったい、おれの先祖はポリネシアか」。

サケは故郷の川へ産卵のためにさかのぼっていき、産卵が終われば死ぬ。カマキリの雄は、交尾を終えると、雌にかじられて死ぬ。

江戸の俳人宝井其角は、カマキリの雄が雌にかじられていく光景に、稔りを終えた草が葉を枯らせていく光景をダブらせて、一句詠んだ。

螻蛄の尋常に死ぬ枯野かな

宝井其角